

◆『Intelligence』購読会員の皆さまへ:ニュース・レターNo.36(2016年5月号)◆

比較的穏やかな天気となった大型連休、皆さまにおかれましてはいかがお過ごしになったでしょうか。さて、発刊されました『Intelligence』第16号はお手元に届いておりますでしょうか。今号も力作が揃っておりますので、お楽しみ頂ければ幸いです。

ご愛読の会員の皆さまには、ニュース・レターとともに「Intelligence」会員専用ウェブサイト <http://www.bunsei.co.jp/ja/intelligenceuser.html> また、会員向けブログとあわせてご覧いただければ幸いです。皆さまからのご意見、ご要望をお待ちしております。

【ブログ用エッセイ募集】会員向けブログでのエッセイは、お楽しみ頂いておりますでしょうか。最近では、加藤哲郎先生に次いで白山真理先生に、研究上の興味深い逸話をご執筆いただいております。このブログのエッセイの執筆希望者を、購読会員の中から募っております。研究に関する小話やヒント、資料紹介などを会員向けブログに掲載なされたい方は、お原稿をお待ちしております。原稿の長さは千字程度、写真を二葉そえてご提出下さい。詳しいことは、事務局までご連絡下さい。

【第101回研究会】(3月26日(土)午後2時30分～5時30分)

・金子彩里香(東京外国語大学大学院)「戦後沖縄における米国の広報活動—『守礼の光』の構造的分析」は、沖縄 CIE によって刊行された広報雑誌『守礼の光』(1959～1972)を四期に分けて、編集部、執筆者、読者、及び記事の内容分析から論じて下さいました。

・宮杉浩泰(明治大学)「日中戦争期日本外務省の対中国情報活動」は、上海及び香港の総領事館で情報活動を担当した外務省の人物と情報提供者を詳述して下さいました。

・西野厚志(京都精華大学)「谷崎潤一郎と検閲—内閣・用紙統制・「A 夫人の手紙」—」は、占領期に谷崎が最初に発表して発禁となった書簡体の作品について、問題となった陸軍飛行場の描写やモデルになった人物などを考察し、検閲の意味を論じて下さいました。

【第102回研究会】(4月30日(土)午後2時30分～5時30分)

・松田さおり(ハインリッヒ・ハイネ大学)「占領期における遊興飲食店—R.A.A との関連を中心に」は、キャバレーをはじめとする占領期の「特殊慰安施設」のさまざまな形態とその実際について、雑誌資料などを駆使して明らかにして下さいました。

・吉田則昭(立教大学)「雑誌『ソヴェト文化』とその時代—占領期におけるソビエト文化の流入・受容の一断面—」は、雑誌『ソヴェト文化』の創刊趣旨、執筆陣、特集主義とその内容について概要を紹介して下さいました。

・馬場公彦(岩波書店)「日本敗戦と中国像の転換—雑誌メディアを中心に」は、戦中から戦後にかけての日本の主要雑誌に見られる中国像の変転を分析し論じて下さいました。

なお、研究会当日に配布されたレジュメは、会員ホームページにアップされています。
<http://www.bunsei.co.jp/ja/intelligenceuser.html> をご覧下さい。

●新年度の20世紀メディア研究会は、6月4日(土)、7月2日(土)に予定しております。研究会でのご報告御希望の方は、20世紀メディア研究所事務所 m20th@list.waseda.jp まで、メールにてご一報下さい。

【コラム:ユーバー(Uber)システムに思う】

三月にシアトルに二週間滞在する間に、初めてユーバー(Uber)を利用する機会があった。ご存じの方もいると思うが、ドライバーが自分の車と運転しても良い空き時間やエリアなどを登録し、一方で利用者が車に来てほしい場所と行く先を入力すると、スマートフォンの画面上で近くを走行している空きのドライバーが表示され、同時に所要時間や料金も表示され、スマートフォンで申し込めば、所定の場所まで来て、行く先まで乗せてくれて、料金は登録したクレジットカードで決済されるというサービスである。

一般のタクシーがつかまりにくい地域では大変便利で、車種もバンやリムジンや子供用の座席があるものなどの選択肢もあり、ドライバーの側は車さえあれば、空いた時間に稼げるという優れた

システムである。ドライバーのプロフィールは、名前と共に性別や年齢や趣味などまで入っていて、何かトラブルがあった際には、システムを管理するユーバー社に連絡すれば、ドライバーの評価として登録される。その評価を見て利用者は選択できるため、ドライバーは評価を上げるために車内をきれいにしたり BGM に気がつかったりするだけでなく、中にはコーヒーを利用者に出すサービスまで行う者もいるという。私が利用した車も一般的な 4 ドアの乗用車だったが、サンフランシスコ出身だというドライバーはシアトルの街について愛想良く話してくれて、指定の場所へきちんと送り届けてくれて、何の不安感もなかった。

2009 年にサンフランシスコで始まったというこのシステムは、今ではワシントン DC をはじめ、全米の主要都市に広まっているという。日本では、もともとタクシーのサービスの水準が高いため、それほど利便性を感じられないかもしれないが、米国郊外でのタクシーのつかまり難さ、タクシー車内が時にきれいでなかったり、座席が破れていたりするような状態を考えれば、このサービスは画期的であり、これから広がり続けるだろう。

このユーバー・システムを知って考えるのは、同様のことが知的な研究でも応用できないかということである。つまり、プラング文庫所蔵資料のような膨大な数の資料を、多くの人がそれぞれに調べて、明らかになった知識や発見を各自システム上に登録し、評価し合い、少しずつ持ち寄った知を積み重ねて集合的に研究を進展させていくシステムである。漠然としたイメージではあるが、これからの研究はそのような方法を新たに開発しながらすすむべきではないかと思う。[5月3日付 文責：土屋礼子]